

2010年 カトリック新潟教区 平和旬間講演会

「差別をきらい平和を好む心」

福音の小さい兄弟会 太田 勝（司祭）

（大阪教区屋形町教会・和歌山県）

○ はじめに

どうも、皆さんこんにちは。暑いところ、お互いですが、しばらく一緒に、差別問題と平和を求める心を、たくさんいただけるように、少しお話ししたいと思います。レジュメに書きましたけれども、お話は、新潟教区でも、部落差別克服に取り組むグループが生まれるとうれしい、という心でお話しします。

部落差別問題というのは、もしかしたら関東ではそれほどないと、言われているんですけども、実際には、少しでも、自分が部落の人であるということを言ったら、結構きついですよね。だから、ない、とは言いながら、関西だったらカミングアウトできるのに、関東では全然できないというような事情もありますから、どこが差別がきついかというと、もしかしたら、関西よりも関東の方がきつんじゃないかな、と思います。

差別を受けることによって、今の社会からはじき出される人たちがいるということは、キリスト教の立場からみたら、信仰を持っていて、世界の人と兄弟姉妹の交わりを作っていこうと、そして、交わりの世界としての神の国を作っていこうという、キリスト教の理想からいえば、差別を克服するグループが、正平協のグループはできているんですけども、もう少し具体的に部落差別に取り組むグループが生まれたらうれしいな、と思います。

結論的になりますけれども、宗教というものが、差別を隠してしまったり、愛しているからもう差別はないのよ、というような形で隠してしまったり、抑圧してしまったりする形ではなく、本当に、癒し、交わり、解放、をもたらす、プラスの面に強い宗教として、カトリック教会が生きていけるんじゃないかと、思います。具体的に、そういうメッセージが届きますように、という願いをもって、私のつたない経験を、お話ししたいと思います。この問題はこう解決しなさいとか、私はこう解決しましたというような話じゃなくて、どういう経緯で、差別問題にかかわるようになったか、かかわるなかで、どのくらい自分としての深まりとか、人々との連帯が深まっていったかとか、心の動きの面のお話をしたいと思います。レジュメでは、五つぐらいポイントを書いていますけれども、少し端折りながら行くことになると思いますので、ご了承くださいたいと思います。

1. 自分の体験から

○ 小さい兄弟としての生き方探求 - 山谷へ、秩父へ

僕が小さい兄弟として、生きてくときの、生き方の探求、とメモをしてありますけれども、小さい兄弟は、ちっちゃい、一粒の麦として社会の中で死んでいけばいいんですけども、社会の、なるべく下積みの立場で生きていくことができれば、社会の中に対流効果みたいなものが、お湯が沸くみたいに、下に火がついておきますと、水も上の方まで温かくなっていく、という風に考

えています。小さい兄弟としての修練をフランスとイタリアで受けて日本にもどってきて、どこで暮らすかと、寄せ場の山谷、ご存知ですよ、山谷と、在日コリアンのところと、被差別部落と、沖縄の4か所を考えました。具体的には、一緒に来たイタリアの兄弟が日本語を勉強しなくちゃいけなかったんで、東京の山谷という寄せ場、南千住という駅でおられるんですが、その一つ川向うの北千住に、アパートを借りて住み始めました。その当時、いろんな方が山谷にかかわっていられて、ここにいらっしゃる佐藤神父さんも神の愛の宣教会の志願者かなんかで活躍していらっやって、僕と同じアパートだったんです。そういうつながりもありまして、今回お招きいただいたと思います。

南千住にあった寄せ場の近くで、小さい兄弟として、10年ぐらいそこにいたわけですが、一緒に住んでいたフランス人とイタリア人の兄弟が、山谷というところは、いろいろ出来事がドラマチックでおもしろいけれども、確かに、単身者の町なんですね。それで、日本の社会の中に根を下ろそうと思ってきているイタリア人とフランス人の兄弟は、ちょっと、普通のところで暮らさせてくれ、ということで、10年ほど、埼玉県の秩父市というところに暮らしながら、志願者とか修練者の受け入れをいたしました。

○ 小さい兄弟として、さらに — 和歌山の被差別部落へ

そのうち、被差別部落出身の方が、僕らのグループに入ってきてくれたので、田舎の小さな、人口6万ぐらいの町だったんですけども、そこで普通の生活、教会生活をしているということから、もう一度、小さい兄弟らしく、どこかに行こうということで、被差別部落に行くことにしましたが、関東の部落はオモテになかなかでてこないんですよ。人数も関西みたいに多くない。それで僕らを指導している責任者がヨーロッパにおりまして、そのときはベルギーにいたんですが、関西に行っちゃった方が、幅が広がるんじゃない、ということで、関西に住むところを探して、行きました。

住み始めた和歌山の部落は5千人ぐらいですから、部落の人も、部落の中に十分、皮なめしの産業とか、薬品関係の仕事とか、いろんな仕事があるので、自分たちの部落から外に出ないで、差別体験をそれほどしないで暮らすこともできちゃうんです。でも、外で仕事を探すこともあるわけですね。外で仕事をして、会社について、会社の旅行なんかをすると、一泊するときに気がついてみたら、自分の部屋にはだれも一緒に泊まる人がいなかったとか、そんな形の差別を受けるといことが、5千人の部落でもあるわけです。部落の中に住みこんで、所属している教会、この教会よりもちょっと大きい、屋形町教会というのがあるんですが、部落の出身の方が20人ぐらいいらっしゃるんです。その方たちと、僕らも部落の中で、アパートを修道院にして住むという形で、生活をしました。

○ 差別語問題・「生かそういのち」p.55～75

そうしている中で、僕にとっては、ちょっと大きい事件がおきたんです。カトリック教会の中で、差別事件というのがおきまして、(3)和解への歩み、というかたちでとりあげております。このケースがおきた1990年ぐらいというのは、カトリック教会のいろんな出版物のなかに、「特殊部落」という差別語が多く使用された時期で、それまでは、あまり指摘されていなかったんです。

1990年のちょっと前に、曹洞宗の宗務総長をやっていた町田さんという人が、アメリカのプリンストンでの世界宗教者平和会議で、日本には部落差別というのはありませんと、そのようなことを認めるのは、日本の国家の恥です、という風な発言をされて、問題になりました。宗教者として、ほんとに日本の社会を知らな過ぎるということで、宗教者が立ち上がって、「同和問題に対する宗教者連帯会議」というものをつくるような、そういう雰囲気の時でした。カトリック教会もこの動きに促されて、自分たちの中の出版物の中に、「特殊部落」という差別用語を使っているケースが続々とでてきたんです。良い意味で言おうと思つての文章の中に、カトリックはいつも何か特殊部落を形成しと、閉じこもってはいけないう、という意味で言いたいわけなんです、その時にポロっと、差別語を使ってしまふ。「ゲッター」を翻訳するときに使うとか、10件ぐらい、ずっといろんな事件がおきたんです。

そういうことが起きているときに、僕が大学で指導していただいた、沢田和夫神父さんという尊敬している方がいらっしゃるんですが、ジャン・バニエの黙想会の通訳をなさったんです。ジャン・バニエが、カトリック教会はゲッターみたいになっちゃって、これじゃだめだよ、と言ったときに、ゲッターということばを沢田神父さんが訳す時に、同時通訳ですから、「特殊部落」と使われたわけですね。その時は、だれも気がつかなかったようなんですが、テープに残って、とてもいいお話だったんで、販売される形になったんです。それを聞かれた方が、あつ、これは差別用語、知らないままで見過ごすわけにはいかないと、問題提起をされました。

沢田神父さんを攻撃するという意味じゃなくて、カトリック教会の中に、特殊部落という形で、ずっと差別されている人たちが存在することを知らない人が非常に多い。知っていた場合にも、特殊部落ということばを使って、この人たちを日本の社会からはじき出したままで、切り捨てたままで、この人たちはちがう人ですよ、という形で兄弟姉妹の絆を否定する。そういう動きが、知らない間に、そういう差別をしているわけですね。それは、やっぱりおかしい。キリスト教として、世界全体の兄弟姉妹のことを、自分の兄弟姉妹として理解していかなくちゃいけないはずだし。有名なサマリア人のたとえがありますね。イエスさんの教えは、あなたも、サマリア人のようにしなさい、自ら進んで、隣人になっていきなさい、と言われていたわけですね。今の時代で、サマリア人の話を聞きますと、建物の隣の人に挨拶しなさい、という程度のことじゃないんです。74 ページを開いてください。イエスの立場からいきますと、隣人になっていくというのは、あなたの暮らしている社会の中で、一番苦しい立場に置かれている人、その人の隣人なるんだ、そういう意味が、現代のサマリア人の理解だということですね。特殊部落ということばを使うことによって、ある一つのグループを自分の生活から切り離してしまふ、関係ないものとして扱ってしまふ、その人たちがどういふ苦しみをしていたとしても、自分には関係ない、見えないんだつたら、その人は存在しない、そういう態度が困るんですね。キリスト者として意識的になおしていく、そういうこと考えていく、そういう取り組みをしなくちゃいけない。

この問題をたまたま沢田神父さんという方が、古いというと変ですけども、今もう90歳ですよ、ですから戦前からの差別、日本の社会は差別社会ですから、その差別社会の中で当然のこととして使われてきた差別語というものを、知らない間に自分の中に植えつけられていた。だいたい差別っていうのは、子どものころに、あそこ行っちゃいけないよとか、あそこ的人是こわいよとか、親からの教えによって、実際には行ったこともないところに、恐怖感を覚えるというようなことが、差別の根にあるわけです。そういうようなことを、一番、教会として取り上げなくちゃいけ

ない、ということで、沢田神父さんのこの問題を、僕らの委員会で取り上げたわけです。

結果として、どういうことになったかという、カトリック教会の中に、ずっと、体質的に、雰囲気的にある、差別を許してしまう体質を変えなくちゃいけない、という動きがでてきて、東京に部落問題委員会というのが作られて、司教団も勉強して、『部落差別を克服するためのカトリック教会の基本方針』という小さい50円のパンフレットで、安いもんですけれども、司教団の中の社会司教委員会の声明としてパンフレットが出されたんです。カトリック教会全体として、大事な問題として取り組もうと。それは、信仰の立場からして、取り組む必要がある。なぜならば、日本社会にいる一部の人たち、六千部落、三百万と言われるんですけども、三百万の人たちを、いない人、存在しない人、特別な人、関係ない人、自分がかかわりたくない人、あるいは、結婚の問題が出てきたら断る人、と扱うことは、犯罪です、罪です、と教会はいったんです。これは信仰の問題として、大事にしくちゃいけない、ということですね。

2. キリストの望み

○ 小さい人々の一人になる、とはどういうことか？

聖歌における差別「ねっとわーく できたかな」p. 217～244

『ねっとわーく』の217ページ、第6章、聖歌における見えない差別、というページがありますね。この中で、一番大事なことを申し上げますと、結局、差別というのは、一部の人たちを、見えない存在、存在しないものとして、自分の、構成している社会から、はじきだしているということがあるんですね。当然のこととして、その人たちの立場になんかとても立てないんです。でも、この人たちの立場に立つということが大事なわけです。

私たちは、部落差別問題の合宿をするときは、ミサの中で、「水平社宣言」を奉納するんです。自分たちが見えないと思っていた人たちが、どれほど差別によって苦しんでいるかということ、この人たち自らが宣言したのが水平社宣言なんです。その人たちの叫びが聞こえるわけです。私たちの心としては、その叫びを奉納するだけじゃなくて、普通の生活の中でも、見えない立場、小さい立場に追いやられている人たちの立場にたつということが、どれほど大事かということですね。例えば、ハンセン病の人たちの問題がありますよね、最近になって、皆さん、ハンセン病の人たちのことを考えるようになって、新聞記事もずい分できていますが、いわゆる熊本裁判がおこるまでは、みんな、ハンセン病の人たち、知らなかったんですね。

「小さな人々のひとりひとりを見守ろう」、この歌、皆さん、ご存知でしょ。みんな、歌っているんです。僕もね、山谷へ行って、クリスマスのときに、この歌をうたったんですよ。何も知らなかったら、とてもいい曲だったんです。ああ、自分は小さい人々のことを思ってここに集まっているんだ、と思って、うれしかった、この歌をうたったときにね。でも、本田神父さんが書かれています。『カトリックの典礼聖歌集に「小さい人々の」というのがあります。わたしは、これがとても好きでした。メロディがきれいだし口調もいいし、ハモったりすると気持ちがいい。音楽的にはすぐれているんですね。ところが、脳性麻痺の障害を持っている1人の先輩からあるとき、「わたしはこれを聞くたびに、ほんとうにつらい思いをしている」と聞かされて、「あっ、そうなんだ」と気がつきました。』

あるとき、脳性まひの障害をもっている人が、わたし、これ聞くのやだ、と。小さいものとして、

見守られる、やめてくれ、と。実際に小さい立場に追いやられている人たちが、これをうたわれたときに、どうするかですね。山谷で僕ら、気持ちよく歌ってきたんですが、山谷のおっちゃんたちが、何、考えたかといったら、おいおい、おまえら、何しに来ているんだ、と必ず思ったと思うんですね。本田神父さん、ここに自分で、こら、偽善者、と言われたと書かれているんですが、ぜひ、皆さん、読んでくださいね。

やっぱり、一番僕らが気をつけなくちゃいけないのは、自分たちがいいことをしている、自分たちは、すばらしく時間を使って、山谷まで行って、釜ヶ崎まで行って、震災の現場に行って、いいことをしている、という風に思うわけです。受け取る方はそうじゃないんですね。震災の現場の場合には、助かるという率直なお礼が聞かれると思いますけれども、クリスマスに年に一度ぐらい、歌うたわれたって、そんなお礼なんかしたいと思いませんよね。だけど、年に一度いった僕らは、ほんとにいいことをしたものとして、思うわけですね。自分たちがほんとに、そういう小さくされている人たちの立場にたたくちゃいけない、ということですね。

○ イエスが示されたこと

ですから、そういう立場でいえば、カトリック教会の中で、なんでそういうようにするかというと、キリストさんの「へりくだり」、キリストさんが神でありながら、人間となり、しかも、十字架の死まで引き受けてくださった、へりくだりの姿勢に私たちがあずかっていく、それが、実にすばらしい信仰の生活だと、僕ら思うわけですね。でも、本田神父さんは、釜ヶ崎に、ずっと暮らしながら、どうもちがうようだな、と感じていらっやって、どうもちがうようですね。

私たちが勝手に神様の像をつくりあげている。イエスさんが示そうとてくださった、イエスさんが示された神様の姿だけが本当なんですよ。僕らは、仏教の理解とか、自分の天国理解とか、自分にとってなぐさめの世界とか、そういうものをキリスト教の世界に持ち込んで、これがイエス様だ、というように、思っているんですね。でも、本田神父さん、そう言わないんです。私たちが知るべき神様の姿は、イエスさんご自身が私たちに伝えてくださった、それこそが、まことの神の姿であって、皆さんが勝手に想像したり、親から言われたり、それが神様では、ありませんよ、というんです。

皆さん、考えてください。ここに集まってくる方々に、天国ってどういうところですか、と聞いたら、ものすごい差がありますよ。天国は僕の愛する犬と一緒にいるところとか、木が素晴らしく茂っていて、魚釣りができるところとか、天国には、動物なんか一匹もないよ、草もないよ、神様と直接、目と目を合わせてずっとすわっているんだ、という人もいるでしょうね、ものすごい差がある。それは、みな、勝手に作りだされた神様の姿なんですね。本田神父さんのいうのは、イエスさんが示された神様の姿。それは、一番、低い所に立って、一番、虐げられている人たちが、自信を持って立ち上がるのを励ます、そばにいるから、低いところにたつて、そういう小さくされた人びとのそばに、ともにいてくださる。だから、謙遜に、自分が今までの楽な生活から、山谷の一日おにぎり5個の生活にもどってしまうというような、へりくだりの生活がすばらしいのでなくて、イエスさんはもっともっとそういう人たちと、実際に、共に、そして、その人たちを自分が助けることよりも、尊敬する、大事にする、人間として扱う、という扱い方をされた、ということです。

それが、部落差別の問題にかかわっていくときに、僕は得したよと思うのは、やっぱり、自分の

イエス像、宗教的な立場が広げられて、深められていくこと、ですね。ですから、ぜひ、ちっぽけな機会かもしれませんが、『ねっとわーく できたかな』とか、『生かそう いのち』、とか、こういうものの中にある、自分の信仰を広げるチャンスにできる、というものとして、差別問題を考えていただきたい。なぜかっていうと、差別っていうのは、そこら中にころがっているんですよ。例えば、黒人と白人がいて、白人だったら安心してしゃべるけれども、黒人だと少し安心できない、ということがあったとしますよね。同じ人間だけど、色のちがいによって、色がちがうのは分かるから、それは差別ではなくて、区別です。区別の次に、黒はきらい、白は許せる、という価値判断をいれたとたんに、差別ができるんです。白人となら結婚させるけど、黒人とだったら絶対結婚させない、というお母さんがいるとすれば、そのお母さんは、黒という色に対して差別感情をもって価値判断をしているんですよ。そういうこと、いくらでもあるでしょう、社会生活でね。そういう差別を乗り越えることによって、人間というのは、皮膚の色じゃない中身なんだ、と分かるし、人間の素晴らしさに一步入ることができる。でないと、色だけで、とどまっちゃう。表面だけでとどまるんですね。

そういう意味では、差別を乗り越える、差別をしない心を持つということは、まあ、言ってみれば、人間が原罪におちる前の本当のすばらしい人間としての、神様の似姿としての姿を回復していく。僕らは差別心だらけですよ。子どもに対してだって差別しているだろうし、年寄りに対してだって差別しているだろうし、今、死のうと病院で苦しんでいる人に対して、目をつぶりたい、と思っているだろうし、いろんな差別をしていますよね。

でも、そういう差別を乗り越えて、ほんとに人間としての交わりを求めていけるということが、差別問題にかかわるすばらしさなんですね。でないと、僕らにとって天国とは安心して暮らせる素晴らしい「場所」になってしまうんです。天国は場所じゃない。「関係性」なんです。どういうつながりを私たちが人ともったか、どういう交わりを私たちが築いてきたか、それが神様の前で試されていく。天国は場所でなくて、関係性。差別問題ほど関係性がゆたかなものはないんですね。差別問題を扱うことによって私たちは深い人間としての関係をもてるようになる。新潟でも差別問題を考えるグループができてくれればうれしいな、というのが僕のお願いです。

3. 理想を捨てずに日本の現実を生き抜く

○ いのちを守るための緊急アピール（社会司教委員会）

2009年1月13日に、司教団の中の社会司教委員会が、『2009いのちを守るための緊急アピール』を出したのをご存知ですか。要するにリーマンショックのあとに、派遣切りなんかでどんどん切られたり、職を失って放り出されたりする人が増えてきたのを見て、社会司教委員会で、特に幸田司教さんが頑張って。リーマンショックというのは100年に一度の危機とか言われていて、今も続いているわけですよ。昨日の新聞では、大学卒業、高校卒業の人の就職率が、ものすごく下がっているでしょ。社会的なものすごいショック、野宿の人が増える、ということの前にして、「派遣村」が東京の日比谷でありましたよね。社会がそれを要求しているときに、カトリック教会は、例えば、お聖堂、修道院で、学校で、空いている建物があるでしょ。そんなの全部つかっちゃえ、という勢いで、司教団が声明を出そうと思ったんですね。

阪神淡路大震災のときに、大阪教区では、大司教さんが命令してね、各教会は、お聖堂とか

の建築費を貯めているでしょ。貯めている半額出せ、と言ったんです。素直に半額出したんですよ、大阪教区ではね。

それと同じようにして、日本の教会は千載一遇のチャンスだから、本当にやることができればね、パッと出せばね、カトリック教会がどれほど社会的な困窮にある人たちを助けられるかという証拠になる、ということで司教団は張り切ったんですが、現実をみるとね、日本の教会にはそれほどの実力がなかった。

話が飛びますが、初代教会でキリスト教がものすごく伸びたことがあるでしょ。あのときは、カトリック教会に入った人たちの献金の割合がどれくらいあったと思いますか。ユダヤ教は、皆様ご存知のように 10%ですよ。今、それを継いでプロテスタントも 10%でしょ。カトリック教会の現実の献金の率はどれくらいご存知でしょ。1%。プロテスタントは 30 人信者がいれば、牧師一人養える。カトリック教会は 300 人いなければ神父一人養えない。それが現実でしょ。カトリック教会の献金は、1%。

でも、初代の教会では、ペトロやパウロがローマに宣教して、ローマで殉教しましたけれど、その当時のローマでは不思議なことに、奴隷であるか、または、両親が奴隷の人が、ローマ中の人口の 90%だったんです。ローマ時代の奴隷っていうのは、ギリシア人で、ギリシア語を教える人なんかも、家庭教師なんかをやる人なんかも奴隷ですから。普通の生活をしていたんですけども、売買される対象だった。そういう人が 90%。だから、その人たちのところに宣教して行って、献金率は 20%から 30%だったんです。だから、奴隷を買い戻したり、この人が生活できるように、教会に入ったら支援しましょうと、自分の生活の収入の 20%から 30%を教会で使ったんです。それだけの力があつたから、ユダヤ教は伸びなかったが、キリスト教は伸びた。そういう風に言われている。リーマンショックのときに千載一遇のチャンスだから、教会もお聖堂を空にしておかないで、野宿の人をいれましょう、ということをやりたいかったんですね。でも、実力なくてできなかった。

○ 世界にあるどのような苦しみにも心を閉ざさない

和歌山ではね、神父さんが張り切って、台風がきたっていったら教会にいれるんですよ。正月は、寒いでしょ、その時には、信徒会館のホールに泊っていいよ、と。僕ら、市役所に交渉に行ったときに、あのね、この金もろくにない、信徒もろくにない、カトリック教会だって開放しているんですよ。市役所はこんなに建物があまっているんじゃないですか。どうして、市役所が建物を提供できないんですか。僕ら、交渉して、今日は座り込んで出ませんから、ここに泊まります、って言ってね、やったことありますけれどね。いろんな思惑とかを抜きにして、独創的なことを教会ができればね、とてもおもしろいんですよ。

『「和歌山・夜回り会」の活動記録』p.154～156

『1999 年、市内だけでなく、貴志川町の大池遊園にも野宿の人がいるようになったこと、聖書 100 週間研究会でエジプト脱出の民のことを学んだこと(神は全人類の幸福をのぞんでいる。まず一番苦しむ人たちから救いの手をさしのべる)』

これが、神の姿であると、勉強していたんです。そして、野宿の人たちがいるということに気が

ついて、聖書の民と重なるんじゃないかと、私たちは、最初、おにぎりももたず、ホカホカカイロを持って、和歌山駅に、おそろおそろ行ったんです。駅が夜の 12 時 20 分になったら追い出されちゃうことも知らなかったです。お城の中にも、和歌山城は結構広くて、木の陰に泊まることができる。見えないところに安心して眠れる場所があるんですね。30 人ぐらいいたかな。その時の思いというのは、なんで支援するかっていうと、基本的には、この人たちの、奪われてしまっている人間の権利を返しましょう、そういう立場ですよ。そうでないと、僕らの方も、偉い人みたいになっちゃうし、大変なことをしているんだ、みたいになっちゃうんですが。人間としての権利を、われわれ市民が奪っている。最初は、会社を首になったりしているんですが、大きく見たら、市民としても、信仰者としては当然ですが、その人たちが当然持っている権利をとりもどせるように、働きかけたんです。

○ 無縁社会日本

今、日本の社会は、無縁社会とか、この前もお母さんが二人の子どもを置き去りにする、ということがおきるわけです。だんだん、人間の絆が失われていく、時代になってきています。カトリック教会も、年とってきたし、老人が多くなってきたし、それほどのエネルギーないから、夜回りなんかできないよって、言っているわけです。現状認識としてはいいですよ。できないことはできない。

だけど、今、日本の社会の中で、やらなくちゃいけないことは、関わりをもつこと。まず、自分の家庭のなかで、子どもたちとか、かかわりをもつことでしょね。昔は、企業戦士とか、仕事ばかりしていた人がいますよね。僕らもそういう時代ですけども、子どもの教育は、奥さんに、妻にまかせておけばいい。俺は仕事してればいい。仕事すれば救われちゃう。そういう世界にいたんですが、それはだめ。いろんなひずみが出てきている。俺はこれはやらなくていい、ということをやめて、基本的には、人間のかかわりは社会を支えているんだ、お互いなんだ、という出発点にもどらないと、無縁社会は変わっていかない。

今日の新聞にあったように、お墓を守る人がいなくなったから、仕方なくお墓をとりこわして、海に骨を撒く。家族がこういう形で崩壊することは、ある程度、現実にありますよね。でも、もっと、お墓を守りましょう、というのは、キリスト教会からみたら、おかしいかもしれない。家族とか、何々家というのは、相対的なものだけど、人間の絆は困りますよね。それを見定めながら、今の社会の中で、とても賢くなくてはいけないと思います。こういう、人間がばらばらにされてしまう、そういう時代にカトリック教会は何をするかっていったら、私たちは神様を信仰しています。私たちは人間がお互いに交わりをもつことによって、はじめて生きていける存在であることを認めます。人間が生きていかれないような社会には反対します。

○ 宗教の倫理性への期待

特に、『宗教とは何か』(テリー・イーグルトン著)というのが出版されて、神学が復活してきている。社会主義は崩壊したし、ナショナリズムも安倍政権が倒れたように、日本のナショナリズムも腰砕けになっているでしょ。本当に社会の中で、自分たちはこれで生きていくんだ、お互いに手をつないでいくべきだと、しっかり言えるのは、宗教しかないっていうんです。『宗教とは何か』を

書いた人は、マルクス主義者なんだそうです。宗教の中には、抑圧されている人たちを励ますような、慰めとかあるわけです。そういう教育的な理由ではなくて、宗教の中には、社会主義に対してもね、社会主義の核心となるような倫理性があるというんです。人間は兄弟である、助け合わなくちゃいけない、という、しっかりした思いがあるということです。普遍宗教ではそれができる、と彼は言っていて、社会主義者やマルクス主義者のくせに宗教を応援しているんです。

こういう本が出だしているということは、今の時代に私たち宗教者がもっている価値は、人のつながり、人と共に築いていく関係性というのは、神の国を築いていくんだ、神の国の建設に結び付いていくんだ、だから、死んだあとに、葬られてミサをささげていただいて、天国に行って、神様のもとに行くというのが、宗教ではないんですよね。死んでからのことを扱うじゃなくて、すでに、この世界から生きる、交わりをもつ、お互いに関係性をつなぐ、ということがはじまっているんです。

カトリック教会が、お聖堂を提供したりする、幼稚園をがらがらになっているのを提供するのは現象的なことであって、やれたらよかったけど、やれなかったのは、金がなかったんじゃない、心がなかったんですね。心があつたらできるんです。野宿の人たち、俺もいつかそうなるかもしれないし、俺のおやじがそうだったかもしれないし、ということで、人間としてのつながりができれば、実現できるんです。関係ない人、知らない人、そういう人は触らないよ、と考え方をしていたら、キリスト教でさえも、せつかく学者が言ってくれているんだけど、倫理性はゼロです。ですから、私たちが本当に、カトリックの信仰に生きていこうというときには、天にまします、を唱えるということは、お題目だけじゃない。御父のもとに、兄弟姉妹であるということです。現実には、時間の制約もあるし、お金も制約があるし、物も制約がある。でも、心はそちらの方向に生きている、心が生きていれば、絶対になんか形ができてくるんです。信仰の世界は強い。私たちがそういう心をもっていくことが、一番大事なんじゃないかと思います。

○ 自分の中にあるどのような望みも意味がある

『支援者の皆さんへ』p.4～5 ④「夜回りに参加して」

『…(夜回りをするようになった)原点といいましたら、夜回りをはじめてからしばらくたったころ、城北公園で、野宿をしている方と声を掛け合ったその後の、ひっそりとした夜の帳の中の風景でした。どうして、人がこのような孤独な生活をするようになるのか、やはりおかしいと思ったことです。』

どうして、こんなに孤独になっていくのか。信仰の立場があるわけですね。人間は交わりを持って生きる。その奥さんは、だんなにひかれて夜回りをしているのですが、『夫について夜回りに参加し始めてから、早や二年目を迎えています。(途中、何度も休みながらの参加なので大変申し訳なく思っていますが)それにしても参加する度に思うことは、なぜ夜回りをされている方々が、まるで家族に対するような真摯な気持ちで、ホームレスの方々に接することができるのだろうということです。』

人間というのは不思議ですよ、出会って、おっちゃんと言っていると、やっぱり、自分の家族の一員みたいに思うんですね。もちろん、自分の家族にその人をつれてくることはできない。一週に一遍しか夜回りはしませんけれども、継続的にその人のことを思うことができる。そして、

こういう人生もあるのか、驚きもあるときもあるし、何で、またこんな同じこと繰り返すのかな、とがっかりすることもあるんですが、関係は切らない。夜回りをしていく。日本社会が冷えていく中で、つながりを確保していく。夜回りをしている人たちは、自分もあつたかくなっていられるわけです。与えることよりも、むしろ、自分が与えられていくことによって、続けていくことができるんです。

ずっと、アパートに入って暮らすことを拒否している人がいるけれども、がっかりしないで、続けて声をかけていくことによって、やっと入居する気持ちになってくれた人もいますね。ある日、クラクラしちゃって、公園の椅子にすわっちゃって、ついに、俺もだめかな、と思ったときに、助けが入ったんですね。何年もかかわっていくなかで、成果が見えてくることもあります。かかわってくることによっての、つながりですね。つながりはとても大事。夜回りをしながら、新しいカトリック教会の理想像がこれだ、というつもりはありません。だけれども、皆さんの生活の中に、かかわりが人をあたたかくしていくんだ、社会を支えていくんだ、という確信をもっていたら、ありがたいと思います。

もちろん、ローマの奴隷制の時代のように、自分のお金の 20%を出すような、そういう光景は、今は、それぞれ核家族ですからできないと思いますけれども、時間の使い方を、人間のかかわりを増やす方向に使っていく、その方が面白い、と思う心を養っていただければ、ありがたいと思います。教会が長い目でみれば、社会主義とか、ナショナリズムが失ってしまった倫理性を持って、社会をつなげていくことができると思います。

余談になりますけれど、3年ぐらい前に、『ローマ帝国はなぜキリスト教化したか？』を読みました。ローマ帝国はそのときに、蛮族がどんどん入ってきて、国として成り立っていかなくなった。ローマ王制は、ローマ法によってローマ法を守る人たちを信じることができただけけれど、蛮族はそれを認めなかった。蛮族の中ではキリスト教がはいってきた。蛮族を含めてローマ帝国を成立させていくためには、キリスト教しかなかった。コンスタンティヌス帝はキリスト教を利用したんです。彼は信じてない。でも、この信仰によって世を救える。それは、キリスト教が倫理性をもって、兄弟性を蛮族に対してもっていたからです。今、僕らが、野宿の人たちに対して兄弟性をもつ、被差別部落の人たちに対して兄弟性をもつという、倫理性をもっていれば、キリスト教は必ず世の中を救う、という動きがでてくるんです。小さいことではあつたとしても、いろんな形の差別を受けている人たち、ネグレクトされている子どもたち、とかかわりをもつ、キリスト教の倫理性を実際にもつことが、兄弟姉妹の国を作っていく動きに参加することだと思います。カトリック教会が元気になるようにお祈りしたいと思います。

2010年8月8日(日)
新潟教会聖堂にて

カトリック新潟教区
正義と平和委員会
新潟地区信徒使徒職協議会
(テープ起こし:新潟教区ボランティア・ネットワーク)